



重層的文脈重視型 「グローバル関係学」の視座： その確立のための予備的議論

松永 泰行

重層的文脈重視型「グローバル関係学」の視座：

その確立のための予備的議論

松永泰行

(東京外国語大学 総合国際学研究院 教授)

はじめに

離れた地点で生起する一見無関係な社会現象が、全世界的な規模におけるレベル・種類・性格を異にする主体・現象間の連結性の増加（いわゆる広義のグローバリゼーション）という総体的な背景の下で、容易には理解しがたい形での関連性を隠し持っているとの想定には、一定程度の尤もらしさ（plausibility）が見て取れる（例えば Urry 2003 を参照）。現代のグローバル化した世界を背景とする種々の危機的な社会現象の解明とそれらの解決策の実践的な模索には、主だった行動主体そのものやそれらの主体間の相互作用や関係性の変化を分析の対象とするだけでなく、主体内部を含む様々なレベル・規模における関係性が、通常の分析レベルおよび時空間的範囲を念頭におく、既存の学問領域に固有の手法においては補足されがたい形において、相互に連結および作用し合い、問題を発生させ、その解決を複雑化させている様態を、新たな研究パラダイムの下で分析することが必要であると提起されている（新学術領域研究「グローバル関係学」 n.d. [2016]; 酒井 2018 も参照）。そのような「新学術領域」としての「グローバル関係学」の構築に一定程度の意味があると考えられるとすれば、既存の学問的な分析アプローチが十分に「グローバル的」でも「関係学的」でもないからという観点を、その根拠として挙げることができよう。本論考では、十分に関係学的でかつ利用に適した実証的社会科学アプローチの一例として、現代的な出来事を起点としながら、その生起において錯綜している重層的文脈に即した社会科学的説明を重視する「グローバル関係学」の視座を確立するための予備的議論を提示することを目指す。

1. 既存のアプローチの問題性とその解決のための条件

1-1. 変数パラダイムと文脈性の排除

シカゴ学派社会学者の Andrew Abbott らが指摘するとおり、今日の社会科学における主流派が採用する「変数パラダイム」に基づく実証研究（variable-oriented research）は、複

数あるいは多数の事例を比較し、規則性に関する一般命題の発見、あるいは繰り返されるパターンやその背後にある因果の仕組み (causal mechanisms) を解明する形でなされる。そこでは、文脈や関係性から引き離された「特性」(disembodied “properties”) としての変数、あるいはその組み合わせを介して経験世界における規則性一般、とりわけ社会事象発生の背後にある普遍的な因果関係の解明をめざしている以上、個別の文脈 (context) による因果関係の決定 (determination) は説明の論理から意図的に排除されることが多い (Ragin 1987; Abbott 1988, 1992, 1997, 2001; Hall 2003 を参照)。この傾向性を正当化する根拠の一つとして、歴史学とは異なり社会科学においては歴史的個別性 (historical particulars) の解明を目指してはいないから、という説明がなされることがある。しかしながら、この「変数パラダイム」に基づく実証研究の手法においては、より広範な事例にわたり観察される (いわゆる堅牢な robust) 規則性を見出すことを求める余りに、文脈性の排除がいわば行き過ぎる傾向がある。この傾向性において、本論考の観点から最も問題視されるものは、文脈性の排除の一環として、広義の順系列 (sequence、すなわち関連する原因が関与し始める順序)、とりわけ、タイミング (timing)、関与の期間 (duration) などを含む時間軸上の順系列 (temporal sequence) — およびそれがもたらす文脈上の質的变化 (Burawoy 1989; Sewell 1996) — が、因果関係的に重要な要素であるとは考えられず、排除されてしまう点である (Abbott 1991; Pierson 2004; Sewell 2005)。変数パラダイムに基づく実証研究において時系列 (time-series) データが検証の対象になる場合でも、多くは件数の推移、すなわちトレンドを見るために使われるだけであり、順系列を捨象しない形で検証対象が変数として捉えられることはほとんどない (Abbott 1991, 205; Cf. Abbott 2001)。

1-2. 順系列の因果的効果や時間軸上の因果作用の視座を排除する既存アプローチの一例

Charles Ragin (1987, 2014) の「比較分析法」は、変数パラダイムの枠組みの下での標準的なアプローチである回帰分析にまつわる方法論的課題 (e.g., 相互因果関係 reciprocal causation, 交互作用効果 interaction effects) を因果的複雑性 (あるいは多元複合的因果性 multiple conjunctural causation) として捉え直し、それへの技術的な解決策を提示する先見的な試みとして定評がある (例えば Hall 2003, 383, 387, 389 を参照)。Ragin は、その多元的かつ複合的な因果性への視座の基礎を、個別事例を歴史的な文脈において検証する質的研究 (例えば Moore 1966) における「いかに」という問い (the “how question”) に忠実であることに求めた (2014, xix)。しかし、その Ragin ですら、複合的な組み合わせにかかわる

「いかに」の問いへの視点 ("how different conditions combine to generate qualitative change") —いわゆる彼のいうところの「複合的思考」(the configurational thinking) —を重視する余り (Ragin 2014, xx-xxi, xxii; cf. Ragin 2006)、文脈が与える因果的影響への視点、とりわけ時間軸上の因果作用を説明する「道具／仕掛け／意匠」としてのプロセスやナラティブへの着目を驚愕するほど失うにいたったと批判されている (Abbott 1991, 229 参照)。

1-3. 時間軸上性、系列的論理、因果の順系列への着目が鍵

その一方で、社会的文脈と社会的時間の中で起こった「出来事」としての、検証対象たるデータの性格上 (Griffin 1992, 405)、時間軸上性 (temporality)、系列的論理 (sequential logic)、因果の順系列 (causal sequence) への着目こそが、社会事象の説明には欠かせないと主張する社会学者も少なくない (Giddens 1979; Abrams 1980, 1982; Abbot 1991, 1997; Aminzade 1992; Sewell 1996; Griffin 1992, 1993; Pierson 2000, 2003, 2004; Lachmann 2013; Cf. 近いが同じでない同様の議論: Tilly 1994, 2001, 2006, 2008; Hall 2003, 2016; Bennett and Elman 2006a, 2006b; 久米 2013, 195-196, 217-218, 222)。

これらの先達の卓見をふまえ、グローバルな危機の解明とそれらの解決策の実践的な模索という目前の課題に応えるためには、①これまでの経緯、文脈を無視あるいは捨象した、抽象的な意味地平における関係性 (e.g. 独立・従属変数間において検証される関係性や規則性) に着目する研究 ("temporality- and contextualization-free generalizations"-seeking relational studies) や、②同様にこれまでの経緯や文脈を無視した、「現状」を横並び的に観察する共時的 (synchronic) な関係学 (e.g., 歴史的・構造的側面への視点を欠く「グローバルゼーション」研究) でもなく、③変化を時間軸上の繋がり of 展開、すなわち順系列的 (sequential) であり過程的 (processual) である繋がり of 展開として見る、通時的 (diachronic) な意味での関係学 (diachronic studies on complex, sequential, multi-layered processual relations) でないといけない。これを定式化すると、以下の形にまとめることができる。

【十分に関係学的で利用に適した実証的社会科学アプローチとしての重層的な文脈重視型「グローバル関係学」の定式 (その1)】

単に関係性に着目すればよいということではない。「通時的な関係性」でないと、求められている関係学にならない。

1-4. 何がどう違うのか

既存の主流派の社会科学的接近法と、求められる「グローバル関係学」的オルタナティブを、それぞれの（１）存在論的想定（世界観）、（２）主要な説明のための道具（要素）、（３）分析上の焦点（何を分析するか）あるいは手がかり（何から検証を始めるか）、（４）調査の際の姿勢（研究対象としての社会事象への向き合い方）の観点から対比させると次の表１のようにまとめることができる。

表 1: 何がどう違うのか（対比）

既存の（主流派）社会科学的接近法	「関係学」的オルタナティブ
（１）存在論的想定（世界観） ●The social world is made up of fixed entities and changing attributes. ●Structures may enable or inhibit action. ●Change may also result from strategic interaction among actors.	（１）存在論的立場（世界観） ●The social world is made up of complex processes of dynamic, interactional <i>relations</i>. ●Social processes may move on many levels at once and intersect in complex ways.
（２）説明の道具（要素） ●Actors, Actors' Preferences, Actions, Interactions, Structures, Institutions	（２）説明の道具（要素） ●Dynamic unfolding and complex intersection ("conjuncture") of processual relations (社会的関係の展開過程と錯綜)
（３）分析上の焦点（何を検証するか） ●Effects of (disembodied) "properties" and "actions" of actors	（３）分析上の手がかり（何から検証するか） ●"Events" (in and through whose unfolding <i>complex, sequential, multi-layered processual relations</i> may be uncovered)
（４）調査姿勢（どう向き合うか） ●Think of the world in terms of variables (devoid of interaction effects) and (autonomous) actors	（４）調査姿勢（どう向き合うか） ●Think of the world and social life full of mutual constitution, interaction effects, and diachronic and multi-layered change

典拠：筆者作成

1-5. なぜ「関係学」的オルタナティブが必要か

ではなぜ既存の主流派の社会科学の手法と異なる、新学術領域としてのグローバル関係学的オルタナティブが必要であるのか。(1) まず、説明の対象である社会事象自体が、そもそも社会的時間と場所の中で通時的、相互構成的に現れる性格を持つものであるから。したがって、その変化、変化の結末としての現状、変化の続きとしての今後の行き末の説明（とりわけ因果的説明）には、社会的時間（個別具体的な事象を取り巻く時空間に即した時間）の経過を加味した、順系列的（sequential）、過程的（processual）な繋がり、すなわち「通時的」関係性の展開過程とその錯綜状況の解明が必要。(2) さらに、リアル・タイムでの順系列付きデータ（real-time sequenced data）を記録分析するテクノロジーの発達の結果、社会科学において、「可変的属性を持つ主体」（entities with variable attributes）の観点から社会的現実を捉える思考から、時間軸上の「文脈の中での出来事」の観点から社会的現実を考えることへのゆるやかな移行（“a drift toward thinking about social reality in terms of ‘events in contexts’”）が見られるから（Abbott and Tsay 2000a, 24; Cf. Abbott 1995; Wu 2000; Abbott and Tsay 2000b）。

したがって、したがって他のアプローチによる「グローバル関係学」の成否の可能性を否定するものでは全くないが、十分に「関係学」的な新学術領域の一形態として、様々な「通時的関係性」（変化を内包した順系列的、過程的で社会構築的な繋がり）が、いかに複雑かつ状況依存的な形で錯綜し「グローバル危機」を形作っているかを研究する手がありうる（他の可能性としては、例えば、より計量的な Wasserman and Faust 1994; Cornwell 2015; より社会ネットワーク論的な Emirbayer and Goodwin 1994; Emirbayer 1997; Mische 2011 などを手がかりとすることが有意義であるかもしれない）。

【十分に関係学的で利用に適した実証的社会科学アプローチとしての重層的文脈重視型「グローバル関係学」の定式（その2）】

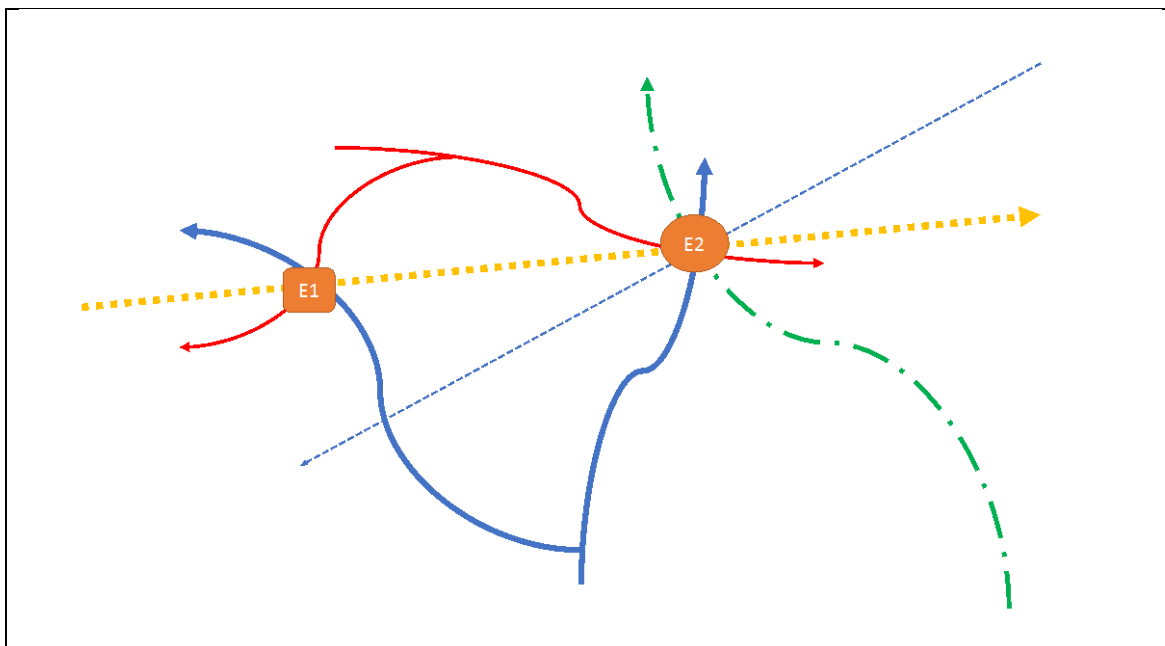
グローバル関係学における「関係学」とは、複雑な「通時的関係性」（complex diachronic relations）、すなわち、（重要な）変化を内包した順系列的（sequential）で過程的（processual）な繋がり（関係性）の複層的かつ状況依存的な錯綜（multi-layered contingent conjuncture）の解明をめざす学問でなければならない。

1-6. 具体的にどう研究すると通時的な関係性を対象とする「関係学」になるか

まず、「出来事」と順系列を手掛かりとすることから出発する (Focus on change as observed through the prism of “events” in and through whose unfolding the complex and multi-layered processes may be analyzed and explained)。その上で、「出来事」において、それまで（比較的）独立的に展開してきていた複数の（時間軸上の）順系列的過程が状況依存的に錯綜する、との想定 (“Events ... are our points of access” [Abrams 1982, 191; Cf. Griffin 1993, 1098] to a particular conjuncture of multiple sequential paths, which may be uncovered and explained in and through their unfolding) に基づき、どの順系列過程がその「出来事」の状況依存的な生起に因果的に関係しているかを確定することをめざす。

まとめると、「出来事」の分析には、（１）（出来事を引き起こす直接の原因となった過程だけでなく、底流や背景として関与している構造的な過程を含め）どの複数の順系列的過程がそこにおいて錯綜しているか、（２）それぞれの順系列的過程、すなわち「社会的」時間軸上の繋がり（関係性）が、その錯綜点（the point of conjunction）までいかに展開してきていたか、（３）そこにおける錯綜の結果、どのような結末（outcomes/consequences）をどのような意味合い（implications）を含み引き起こしたか、がその中核として含まれる。

図 1 : 順系列的過程錯綜のイメージ (Conjuncture of multiple temporal sequences at “events”)



典拠：筆者作成

もし Abbott (1991, 225) が言うように、これらの多層的な順系列的過程のそれぞれが、各々独自のペースで変化をする一方で、相互に条件づけあうという関係にあるならば (“a process whose several layers move at different speeds but nonetheless mutually condition each other”)、上記の図 1 におけるそれぞれの線がこのような内部に複数の層を含む「過程」と解釈することも可能であるし、さらに E1 や E2 のような出来事が一見、繋がっていないように見えて、内実、複雑かつ通時的な繋がりを持つものであるとすれば、それらの一連の発生をそのような「過程」上の出来事ともみなすことができる。

【十分に関係学的で利用に適した実証的社会科学アプローチとしての重層的文脈重視型「グローバル関係学」の定式（その 3）】

複雑かつ複層的な「通時的関係性」の解明は、出来事 (events)、とりわけ一見無関係の複数の出来事 (seemingly unconnected events) を検証することを通して、いかに複数の（一定程度）独立的な、順系列的 (sequential)、過程的 (processual) で、相互構成的な (mutually constitutive) な時空間上の繋がり（関係性）が、それらの出来事の展開において錯綜しているかを因果関係的に説明することで可能となる。

2. 適用例—2017 年 6 月テヘラン襲撃事件において錯綜している重層的「通時的関係性」を明らかにする

本節では、本論で想定する重層的「通時的関係性」の錯綜という分析の視座の適用例として、2017 年 6 月にイランの首都テヘランで引き起こされた襲撃事件を手がかりとする「出来事」として用い、そこにおいて錯綜していると見なすことが分析上有意義であると考えられる重層的な通時的過程の（簡略的な）説明を試みる。

事件の概要は次のとおりである。2017 年 6 月 7 日（水曜日）午前 10 時半、テヘラン市内バハーレスタン広場にあるイラン・イスラーム共和国の国会議事堂に隣接する議員会館の通用門（来館者入り口）に、自動小銃で武装した 3 名の襲撃者が現れ、警備に当たっていた革命防衛隊員 1 名を射殺の上、銃を乱射しながら待合室に突入し、議員会館内に侵入した。10 分後の 10 時 40 分頃、テヘラン市南部のベヘシュテ・ザフラー墓地の西側に位置し、イスラーム革命運動の指導者で 1979 年から 1989 年までイラン・イスラーム共和国の初代最高指導者（国家元首）を務めた Ayatollah Ruhollah Khomeini (1902-1989) の廟（通

称「イマーム・ホメイニー聖廟」)に自爆ベルトを体に巻きつけた襲撃者2名が現れ、警備隊とにらみ合うなか、11時13分頃、廟の外側で1名が自爆を行い、11時20分までに残る1名は警備隊により射殺された。

一方、テヘラン中心部の国会周辺では、3名の襲撃犯はかけつけた治安部隊との銃撃の末、議員会館の4階に立てこもった。襲撃犯が自動小銃の銃弾を使い尽くし、ピストルに切り替えて乱射を続けていた午後1時半過ぎ、シリアのラッカに本拠地を置く「イスラーム国」は、自らの関連広報機関であるアーマーク (A'maq) 通信社を通じ、テヘランでの攻撃に関する犯行声明を発表。続けて、議員会館に立てこもっている襲撃犯が自ら撮影した、部屋で執務中に射殺された議員秘書の遺体へ、イスラームの啓典の章句を解説する一節をアラビア語で叫びながら更に銃撃を加える10秒程度の映像(動画)をA'maq通信社がインターネット上で公開した。午後2時のイラン国営テレビのニュースでは、国会議員会館襲撃事件と「イスラーム国」の犯行声明についての報道がなされると同時に、市民に対し情報の提供の呼びかけがなされた。午後2時14分までには、駆けつけた革命防衛隊陸軍の特殊部隊が議員会館4階に突入し、襲撃犯3名全てを射殺した。国会とホメイニー廟双方合わせて、主に議員との面談のために議員会館を訪れていた一般市民と議員会館で働いていた職員等からなる17名の犠牲者と40名以上の負傷者が出た。

本論が提示する重層的文脈重視型「グローバル関係学」の視座を用いると、このテヘランでの襲撃事件は、分析の手がかりとしての「出来事」と見なすのに適した事例であるといえる。なぜならば、その出来事を入り口とし、そこにおいて状況依存的に錯綜したという背景にある通時的な関係性として、それぞれ固有の社会的現実の文脈を構築する複数の順系列的で過程的な繋がり(いわば、下手で合流する細かな複数の水脈や、後に重要な形で錯綜する推理小説における異なるサブプロットのような、因果的に意味のある社会関係の流れ)を、いくつか見出すことができるからである。ここでは、そのような水流(通時的な関係性)のうち、以下の3つについて簡略的に説明する。

2-1. 第1の水流—「イスラーム国」(スンナ派カリフ制国家) vs. イラン・イスラーム共和国(シーア派イスラーム国家)

事件の翌日、「イスラーム国」はA'maq通信社を通じ、テヘランの事件の実行犯の一部と目される3名の覆面をした「戦士」と2名のインタビュアーが写っている動画を公開した。その中身は、5名の参加者がイスラーム国の「カリフ」とされるAbu Bakr al-Baghdadiへの

忠誠 (bay'ah) を誓うシーンに加え、首謀者風の 1 名の「戦士」がピストルを振りかざしながら、アラビア語での前置きの後、(イラク北部とイラン西部で話されているソーラーニー方言の) クルド語でテヘランのイラン国家への攻撃の動機について演説するものであった。

「イスラーム国」は事件に先立つ 2017 年 3 月末に、イラン国境に接するイラク東部のディヤラーにおける同組織の支部が製作したことをうかがわせるキャプション付きの、(イラン以外の国の訛りを含む) ペルシア語による宣伝ビデオを公開していた。その中で、ペルシア語を話すイスラーム国のメンバーが、イランのスンナ派ムスリムに対し、テヘランの「ペルシア的多神教」国家に対し立ち上がることを呼びかけていた。

事件直後に、イラン国家側は Mahmoud Alavi 情報大臣の国営テレビ番組への出演等を通じ、(1) 実行犯がイラン国内、より具体的には、イラン西部のイラクとの国境地帯の出身のイラン国民であったことを認め、(2) それらの者と襲撃部隊の長 (amir) が事件前の数年の間、国境から不法に出国し、シリアのラッカやイラクのモスルにおいて「イスラーム国」組織に参加した後、事件前に国内に戻り短期間潜伏した後、テヘランでの事件を引き起こしたこと、さらに (3) 事件以来、それらの者の再入国や潜伏を手引きした関係者の摘発と逮捕が、イラクとの国境に位置するケルマーンシャー州で行われていることを発表した。その際、情報大臣の言説では、実行犯や背後関係者は「イラン国内の出身者」で「国境地帯で活動」し『「イスラーム国」組織に参加した『テロリスト』』としてのみ語られていた。しかし、テレビ番組の視聴者には、そこで言及されているケルマーンシャー州西部やそれと接するコルデスターン州がスンナ派ムスリムであるクルド系イラン国民が住む地域であることは周知の事実であり、その文脈においては、同事件は、シーア派のイスラーム国家であるイラン・イスラーム共和国体制に対し、イラン出身とは言え (イラクやシリアに拠点を置く) 「イスラーム」国の「カリフ」の下へ参集したスンナ派イスラーム主義者が引き起こしたものであるとの印象を強く与えるものであった。

イラン国家と「イスラーム国」との直接的な対峙は、「イラクのイスラーム国」と名乗るスンナ派 (ジハード主義サラフィー系) イスラーム主義組織が、2011 年のシリア内戦勃発後に、シリア東部のユーフラテス川沿いの地域に展開し「イラクとシリアのイスラーム国」と名乗り、さらに「イスラーム国」と改名しイラク第 2 の都市モスルを陥落させた 2014 年 6 月まで遡る。「イスラーム国」勢力はモスル奪取の直後に、イランとの国境に瀕接するイラク首都バグダード東方のディヤラー県の Jalawla (イラン国境から約 30 キロの町) にまで進出。イラン側はそれを、イラクにおけるシーア派イマームの聖廟および西部国境地帯

への安全保障上の脅威であると受け止め、ケルマーン州に駐屯している国軍（正規軍）およびイスラーム革命防衛隊のゴドゥス（Qods）軍の関係者を動員し、イラクのシーア派志願兵を主体とする人民動員隊（al-Hashd al-Sha'bi）への側面的支援を通じ、2014年6月よりテヘラン事件が起こった2017年6月までの期間を通じ、イラク国内において対「イスラーム国」諸軍事作戦に関与していた。

イラン情報省と検察等による事件後の捜査で、今回の事件の首謀者と実行犯の一部は2017年初めに、イラクのモスルの南150キロ程度の町 Hawijah（キルクーク県）のイスラーム国の拠点を発し、バグダード東方の Sa'diyah（ディヤーラー県）を経て、国境地帯からケルマーンシャー州に侵入し、ケルマーンシャー州の州都の隠れ家に2ヶ月程度潜伏し、テヘラン攻撃を実行したことが明らかになったと報道されている。この経緯を踏まえると、少なくともテヘランでの事件の実行部隊を送り出した「イスラーム国」幹部の視点からは、同攻撃はモスル奪還作戦を続けていたイラク政府とその治安部隊、とりわけシーア派志願兵主体の人民動員隊を支援しているイラン国家への（主に軍事作戦上の）報復の意図があったことが読み取れる。

したがって、テヘランでの2017年6月の「出来事」において錯綜したと考えられる一つの水脈（通時的関係性）は、スンナ派（ジハード主義サラフィー系）イスラーム主義組織としての「イスラーム国」とシーア派イスラーム国家（であり軍事的に high capacity な近代国家）としてのイランとの間の時間軸上・空間的な文脈における相互に敵対的かつ動態的な過程であったことがわかる。テヘラン事件の直前の2017年5月末に、イラン革命防衛隊の元司令官であり、1980年代半ばに、創設されたばかりのバドル部隊の最初の作戦司令官であった Sha'ban Nasiri が、モスル奪還作戦に参加のために向かっていた人民動員隊部隊と同行中にモスル南方で道路脇爆弾により「殉教」していることから、「イスラーム国」側はイランが2014年6月以降イラク政府の対「イスラーム国」軍事作戦へ実質的に参加していると見て、報復をすることを意図していたとしても不思議でないことが明らかになる。

2-2. 第2の水流—テヘラン中央政府（ペルシャ・ナショナリストの近代国家） vs. イランのクルド人（ナショナリズム）

1979年のイラン・イスラーム革命で倒されたパフラヴィー王制下のイランは、1930年初頭より、隣国トルコ共和国に倣った西洋型世俗近代国家の建設を目指し、ペルシア人／ペルシア語を中核とする近代的な国民国家像を描き、法・教育制度等を通じ、中央集権的な

統治を進めた。合わせてイランの人口の半数を占める、トルコ系、クルド系、バルーチ系、トルキヤマン系などの国境地帯に居住するエスニック・マイノリティーは、機会がある度にこのペルシア・ナショナリズムに反旗を翻したものの、軍事的・政治的に弾圧されてきていた。1979年2月のイラン・イスラーム革命で国家権力を奪取した、Khomeiniを指導者とするイスラーム復興主義勢力は、12 イマーム・シーア派法学（ジャアファリー法学派）に基づくイスラーム国家の建設を前提としていた。それゆえ、イラン西部のクルド系国民が居住するコルデスターン州やケルマーンシャー州等（イランの「クルディスタン」manateq-e kord-neshin）において、ホメイニー主導のイスラーム革命運動に参加したスンナ派イスラーム復興主義運動の指導者たちと、1979年のイラン・イスラーム共和国憲法制定過程において真っ向から対立することになった（同時に、後述のとおり、世俗主義・左翼主義系のクルド・ナショナリスト運動は、1979年以降もテヘランの中央政府と紛争関係にあり続けている）。

憲法においてスンナ派ムスリムとシーア派ムスリムの法的・政治的平等を明示的に規定することを求め、その要求が受け入れられなかった、Ahmad Moftizadehらクルド人のスンナ派イスラーム主義者は、1980年春以降、イラン東部国境地帯のバルーチスターンのウラマーらと共闘しスンナ中央会議（Shams）を結成し政治活動を継続することを求めた。しかし同会議の活動にも制限が加えられ、1982年8月にはその指導者であった Mofitzadeh も逮捕・投獄され、会議に参加していたムスリム同胞団系のスンナ派イスラーム主義運動の活動家等も地下に潜伏することを余儀なくされた。

その後、イラン国内のスンナ派のウラマーは、イランの最高指導者に敬意を表して、シーア派優位体制を黙認しないと、弾圧される結果となり、多くのスンナ派ウラマーは体制に融和的な姿勢を見せるようになった。非ウラマー系の団体（Jama'at-e Islah va Da'vat や Maktab-e Qor'an）も、1990年代以降、同様に穏健改革路線あるいは非政治的な穏健路線を選択して、公然活動の維持に努めてきている。その一方で、世俗的なクルド民族主義運動も、1979年の革命直後より一貫して中央政府（イラン国家）から、武力鎮圧やメンバーの逮捕・投獄や指導者の暗殺等の厳しい弾圧の対象となり、イラク等の国外に活動の本拠地を置きながら、40年近くに亘り国境付近で治安部隊との紛争等をくりかえしてきた。

この文脈において特筆されることは、ホメイニー以下、イラン・イスラーム共和国体制の指導者たちが、12 イマーム・シーア派のイスラーム復興主義潮流の担い手であると同時に、ペルシア・ナショナリズムの存在と受容を下敷きにした「イランのムスリム共同体

mellat-e mosalman-e Iran」という宗教的ナショナリズムの言説と実践を貫いてきた点である。その観点では、イランのクルド人の半数以上がスンナ派ムスリムであることから、彼らは（政治的にほぼ問題なく許容されているシーア派のクルド人とは異なり）、宗派の観点とエスノ・ナショナリズムの観点の双方から中央政府（および近代国家）から差別・弾圧の対象とされてきた（すなわち二重の意味で「二級市民」として取り扱われてきた）ことは否定できない。また「イラン・クルド民主党」(KDPI) や「クルディスタン自由生命党」(PJAK) のような世俗民族主義やマルクス主義系のクルド・ナショナリスト運動も、テヘランのイスラーム国家の観点からすると、非イスラーム主義の世俗（左翼）運動であるという点だけでなく、非ペルシア・ナショナリズムの運動体である点においても問題であると見なされている点で（つまりナショナリズムの運動体であることが問題なのではなく、非ペルシア・ナショナリズムの運動体である点が、イランのイスラーム国家側からみて問題であるという点で）、同様の関係性—テヘランの中央政府が二重に問題であるとする一方で、運動体の側はそれを克服しようとする社会構築的な相互関係性—を構築してきているといえる。

この文脈においては、2017 年 6 月のテヘラン襲撃事件の 5 名の実行犯、さらに事件後に逮捕・摘発された関係者の全てがケルマーンシャー州出身のクルド人であったことと、襲撃の対象が首都テヘランの国会（「国民の家 Khaneh-ye Mellat」との別名をもつ、国民権の具現化する場）および革命後の初代最高指導者（国家元首）の廟であったことを踏まえると、近現代イランの政治史の文脈においては、その双方（攻撃主体と攻撃の対象）とイラン近代国家の文脈における「ナショナリズムの問題」との関連性を見いださないことは難しい。

2-3. 第3の水流—イランの「クルディスタン」におけるローカル・スンナ派宗教ネットワークのサラフィー主義化

1979 年 2 月のイラン・イスラーム革命の成就と並行して、イラク・クルディスタン経由でムスリム同胞団のイスラーム主義がイランの「クルディスタン」に伝播してきた。その最も著名な担い手は、（現在、イラクのクルディスタンにおいて al-Ittihad al-Islami al-Kurdistani というムスリム同胞団系の政党を率いている）Salahaddin Muhammad Baha'uddin (1950-) ら若手の活動家であった。イラクとの国境沿いの Paveh（ケルマーンシャー州）の出身のスンナ派イマームで、1979 年に Baha'uddin の影響下でムスリム同胞団のメンバーとなった Naser Sobhani (1951-1990) は、パキスタンが対ソ連「ジハード」の

基盤となった 1980 年代に同国に一時期（1 年間ほど）滞在し、Sayyid Qutb、Abu'l-Ala Mawdudi、'Abdullah 'Azzam らの影響下に入ったとされる（現在ノルウェー在住で、2001 年 9 月 11 日の対米攻撃後にイラクのクルディスタンで Ansar al-Islam という急進的なサラフィー主義団体の長（amir）に推挙されることになる、イラクのクルディスタン出身の Najm al-Din Faraj Ahamd [1956-、現在の通称名は Mala Fateh Krekar] も同時期にイラン経由でパキスタンに渡り、同国滞在中に同じ思想家たちの影響下に入っていた）。イランの「クルディスタン」に 1980 年代に広まったムスリム同胞団の思想潮流は、同時期にエジプトで穏健化していたムスリム同胞団のそれとは異なり、イラクのクルディスタン経由で伝播してきたがゆえに、クルド・ナショナリズムと政治的なイスラーム主義が合体したものであった。それに加え、上述のとおり、1980 年代に隣国パキスタンで実践的なジハード主義と結合した、('Abdullah 'Azzam らが唱える) 急進的なサラフィー主義の影響も受けたムスリム同胞団系の政治潮流に繋がるものであった（Sobhani は、上述の Moftizadeh が逮捕された 1982 年 8 月に地下に潜り、1989 年 6 月に逮捕されるまで 7 年間に亘り、秘密裏に出回った自らの著作物や講義を録音したテープを通じ、イランの「クルディスタン」におけるサラフィー主義系のスンナ派イスラーム主義潮流の拡大に貢献したとされる）。

この背景の下、イラン・イラク戦争初期にイランへ逃避してきていたイラクのクルディスタンのムスリム同胞団系のイスラーム主義者が、1980 年半ば以降にイラン国境に近いイラクのクルディスタンの町 Halabjah において、イラクのムスリム同胞団の古参メンバーでもあったクルド人の 'Uthman 'Abd al-'Aziz（1922-1999）を中心に活動を再開すると、1986 年にイラクのバアス党体制にその活動を知られることになった。1987 年 5 月の Halabjah における大衆蜂起が厳しい弾圧の対象となると、'Abd al-'Aziz らは再びイラン側の国境地帯に逃避し、そこで同月 Jama'ah al-'Ulama' al-Muhajirin という団体を結成し、イラク・クルディスタンのイスラーム主義団体としては初めてイラク国家に対する武力闘争をジハード（jihad）として開始することを宣言した。さらに 1987 年 7 月に同団体は、イラク・クルディスタンの他のイスラーム主義団体（1978 年に Sulaymaniyah で結成されていた Harakat al-Rabitah al-Islamiyah）と合流し、'Uthman 'Abd al-'Aziz を指導者とする al-Harakat al-Islamiyah fi Kurdistan al-'Iraq (IMIK) が結成された（付言ながら、1987 年 3 月には、さらに北方の西アーゼルバーイジャーン州において、イランの正規軍はクルドの民族主義政党（クルディスタン民主党 KDP およびクルディスタン愛国同盟 PUK）の民兵と一体となり、イラン・イラク戦争の北部戦線において再び戦端を開いていた。それを受けて、イラクの

Saddam Husayn 大統領は従兄弟の 'Ali Hasan al-Majid を同年 3 月末に北部問題局長に任命し、翌 4 月には化学兵器の使用を含む対クルド掃討作戦が開始されていた)。1988 年 3 月の悪名高い化学兵器による Halabjah における一般住民の大量殺害は、この関係性の文脈（イラン・イラク戦争におけるイランとクルド人民兵 peshmerga との共闘作戦の開始、Halabjah を本拠地とするイラク・クルド人のムスリム同胞団系イスラーム主義者のジハード（武力闘争）宣言とそれらに対するイランの見かけ上の「庇護」）を抜きに説明されうるものではない（付言ながら、イラク国家のイラク・クルディスタンでの行動だけを見て、(1) 全面戦争に従事している国家としてのイランとイラク、(2) イランと KDP・PUK 民兵、(3) イランとイラク・クルド人のイスラーム主義者という 3 つの重要な関係性を適切に取り込めていない分析では、Halabjah に対する化学兵器を使った攻撃は、Ali Hasan al-Majid が命じ化学兵器が使用された他の al-Anfal 対クルド掃討作戦の流れとの対比では「異質なもの」(anomaly) であるとの、いわば「誤った」結論に達してしまっている。これも「グローバル関係学」的な視座からある「出来事」を分析する必要性を示唆する事例であるといえる)。

さて、1988 年 3 月の Halabjah での化学兵器を使用した攻撃後に、その地のジハード（武力闘争）主義者が再びイランへ逃避してきた。これらの避難してきたイスラーム主義者やその関係者は、ケルマーンシャー州の Salas-e Babajani, Ravansar および Paveh, また隣接するコルデスタン州の Kamyaran と州都の Sanandaj に定住し、これらの地区でムスリム同胞団系のイスラーム主義の思想をイランの「クルディスタン」に広める役割を果たした。1988 年 8 月にイラン・イラク戦争が停戦に至り、イラクが 1990 年 8 月にクウェイトに侵攻し、続く 1991 年 1 月からの米国主導の湾岸戦争、インティファダ、飛行禁止区域の設置等を経て、1991 年 10 月以降、北イラクのクルディスタン地域は事実上の自治区となり、1988 年 3 月に避難してきていた IMIK のイスラーム主義者は概ねイラク側へ帰還した。この時期における、その地における IMIK や他のイスラーム主義運動の展開（例えば、1992 年のクルディスタン「国民」議会選挙で IMIK が 5% の得票を得たことや、同運動が 1997 年に武装闘争を放棄したとされること）は、イランの「クルディスタン」との関わり、とりわけそこにおけるサラフィー主義イスラーム運動の潮流の展開の文脈から離れるため、ここでは省略する。

サラフィー主義イスラーム運動の潮流に分析を限定すると、イラク・クルディスタンにおける同潮流は、1998 年頃までに、アフガニスタンで対ソ連「ジハード」に従事したイラク・クルド人らの (Abdullah 'Azzam らの思想に従う) 急進派イスラーム主義者が帰還して

ローカルなジハード主義サラフィー組織を結成し、アフガニスタンに拠点を置く al-Qa'idah の遠方―「グローバル」―ネットワークの一環として進展し始めていた。例えば、2001 年 9 月に、その中心的存在であった Suran 2 部隊（この中にはクルディスタン外出身のアラブ人ジハード主義者が含まれていた）が、Ayman al-Zawahiri から al-Qa'idah 指導部の仲介を受け、ローカルでより小規模のサラフィー主義グループ（Tawhid および Hamas）を吸い上げて結成した Jund al-Islam を率いることになる Abu Abdullah al-Shafi'i は、イラク・クルディスタン出身であるが、アフガニスタン、チェチェンでジハードを経験したジハード主義者であったといわれる。Jund al-Islam はその数ヵ月後の 2001 年 12 月に、上述の古株の急進派サラフィー主義者で（1990 年代前半には一時ノルウェーに逃れていたものの）学識があり地元ではより人望があった Fateh Krekar (Najm al-Din Faraj Ahmad) が率いていたイラク・クルド人のみからなるサラフィー主義団体 Jam'iyat al-Islah と合流すべく Krekar に忠誠を誓い、悪名高い Ansar al-Islam が結成された（しかし組織的には Jund al-Islam のメンバーがその大部分を担い続けた）。Ansar al-Islam にはさらに、al-Qa'idah の手による 2001 年 9 月 11 日の米国同時多発攻撃を受けた米国のアフガニスタン空爆（2001 年 10 月～）を逃れ、（それまでには事実上の自治区と化していた）イラク・クルディスタンに移動してきたアラブ人等を含む（クルディスタンの文脈では外国人からなる）ジハード主義者（niru-ye muhajirin、その最も著名な者は後に「イラクのアル・カーイダ」を率いる Abu Mus'ab al-Zarqawi）が加わり、2003 年 3 月のアメリカ軍のミサイル攻撃で壊滅されるまで、Halabjah の北西でイラン国境沿いの町 Biyarah や Tawilah を実効支配し、（アフガニスタンで Taliban が 1990 年代に行ったように）イスラーム法を厳格に施行した。同グループは、イラク・クルディスタンの既存の世俗的な民族主義政党に対する takfir 裁定（不信心者との烙印を押すこと）を発し、同地域を勢力下においていた PUK と武力衝突を繰り返した。

イランの「クルディスタン」におけるサラフィー主義イスラーム運動の潮流の展開の文脈で最も重要な契機となった出来事は、その 2003 年 3 月のアメリカの攻撃であった。米軍はバグダードのバアス党国家を攻略する一方で、Ansar al-Islam を al-Qa'idah に連なる「国際的テロ組織」と認定し、同組織が実効支配していた Biyarah とのその近辺に対し 3 月 22 日より 2 日間にかけて 70 発に亘るミサイル攻撃を行った。当時 Ansar al-Islam は千名規模の「戦士」を抱えていたとされるが、爆撃での殺害を逃れた「戦士」の多く、とりわけかつて IMIK のメンバーであり、1980 年代後半から 90 年代初めにかけてイランに避難していた経験のあるサラフィー主義者が急進化し、タクフィールを行うジハード主義者

(takfiri-jihadi-salafists) になっていた者らが多数、国境のイラン側に逃避する結果となった。彼らの多くは国境地帯にとどまらず、イラン側の「クルディスタン」のスンナ派イスラームの教学の中心である Sanandaj、Marivan、Saqqez、Bukan などのマドラサの教員やモスクの礼拝導師 (imam) の間に浸透し、(スンナ派を含む) 周りの一般のムスリムに不信心 (kufr) の烙印を押す急進的なサラフィー主義をイランのスンナ派クルド人の間に広める役割を果たした。

その副産物の一つが、2009 年の 9 月に起こったコルデスタン州の州都 Sanandaj で起こった、スンナ派モスクの礼拝導師 Burhan 'Ali の殺害、さらにその 5 日後に同じく Sanandaj において、イランの指導部専門家会議の議員にコルデスタン州より選挙で選出されていた、スンナ派イスラーム法学者 Mohammad Sheikh al-Eslam が同様の手口でモスクの外で殺害された事件であった。その後捜査で一連の事件は、逃避してきていた Ansar al-Islam 関係者がイランのスンナ派クルド人の若者らを巻き込んで結成していた Towhid va Jihad という組織の犯行であることが明らかにされ、2 年以上をかけてその全メンバーが摘発され、逮捕・投獄された。その首謀者等は裁判を経て 2016 年 8 月に集団処刑されている。

米軍の攻撃で散逸した Ansar al-Islam の残党の一部 (al-Zarqawi らアラブ人 muhajirun と一部のイラク・クルド人サラフィー主義者) は、2003 年以降の米国他の占領下に置かれたイラク国内の混乱に乗じて、イラク国内で対占領軍「ジハード」を行う Ansar al-Sunnah 等の急進派グループを組織するにいたった。その一方で、イラン側に逃避した Ansar al-Islam の残党は、イラク・クルディスタンとイラン側の「クルディスタン」にまたがる国境地域で、2007 年以降 Kata'ib Kurdistan li-Tanzim al-Qa'idah として活動を再開した (同組織は 2012 年 1 月に al-Qaida Kurdish Battalions という名称で米国務省より「特別認定グローバル・テロ組織」指定を受けている)。Kata'ib のメンバーは、ケルマーンシャー州を中心にイラン側でも宣伝とリクルート活動を続け、2011 年にシリア内戦が始まり、いわゆる Ansar al-Sunnah の流れを汲む「イラクのイスラーム国」が「イラクとシリアのイスラーム国」(Da'esh) として悪名高い存在となると、イランの「クルディスタン」からもシリアに密航し、同組織に参加する若者もあらわれた。この傾向は、2014 年 6 月にイラク・クルディスタンに隣接するイラク第 2 の都市モスルが「イスラーム国」側に陥落するとさらに強まった。上述のとおり、イランと「イスラーム国」が軍事的に対抗し、「イスラーム国」側がその対抗措置として、イラン国内のスンナ派ムスリムにテヘラン政府への「ジハード」を行うよう呼びかける一方で、自らの実効支配地域からイラン出身のクルド人からなる襲撃部隊を送り込む

ことができた背景には、このような通時的流れがあった。

おわりに

本論では、十分に関係学的でかつ利用に適した実証的社会科学アプローチの一例として、現代的な出来事を起点としながら、その生起において錯綜している重層的文脈に即した社会科学的説明を重視する、重層的文脈重視型「グローバル関係学」の視座の確立のための予備的議論を提示し、その適用例として 2017 年 6 月のテヘラン襲撃事件の「グローバル関係学」的分析を試みた。本論で提起した重層的文脈重視型「グローバル関係学」の定式をあてはめると、2017 年 6 月のテヘラン襲撃事件は、(1)「イスラーム国」(スンナ派カリフ制国家)がイラン・イスラーム共和国(シーア派イスラーム国家)に対して後者の首都で襲撃事件を起こしたものであるのではなく、同事件を入り口とし、いかなる通時的な関係性がそこにおいて状況依存的に錯綜しているかという観点で分析すると、少なくとも、(2) ペルシャ・ナショナリストの近代国家としてのテヘランのイラン国家とイランのクルド人が標榜するナショナリズムとの間の社会構築的な通時的関係性の動態、さらに(3) 中東・西アジアとアメリカを引き込んで、パキスタン・アフガニスタンを舞台に 1980 年以降に、「ジハード」を称される軍事活動を介して動態的に進行しているグローバルな関係性の展開の下で状況依存的に引き起こされた、イランの「クルディスタン」におけるローカル・スンナ派宗教ネットワークのサラフィー主義化という 3 つの別個の通時的な過程が、そこで錯綜しているとみることが有意義であることが明らかになった。

本論で提起した議論を、十分に関係学的で利用に適した視座として確立するために、忌憚のないコメント・批判を期待したい。

参考文献

- 太田有子 [2006] 「比較分析の方法と課題—海外における歴史社会学の研究動向に関する一考察—」『社会科学研究』57(3/4), 19-36.
- 久米郁男 [2013] 『原因を推論する—政治分析方法論のすゝめ』有斐閣
- 酒井啓子 [2018] 『『グローバル関係学』試論:『グローバルな危機』分析のための『関係学』

- を模索する」新学術領域「グローバル関係学」オンライン・ペーパー・シリーズ 第1号。
Accessed 2018年5月20日。
http://www.shd.chiba-u.jp/gblcrss/online_papers/onlinepaper20180520.pdf.
- 新学術領域研究「グローバル関係学」[n.d. (2016)] 「『グローバル関係学』とは」. Accessed
2018年2月12日. <http://www.shd.chiba-u.jp/gblcrss/outline/index.html>.
- 松本康 [2011] 「訳者解説」『社会学科と社会学—シカゴ社会学百年の真相—』アンドリュー・
アボット著、松本康・任雪飛訳（ハーベスト社）、310–328.
- Abbott, Andrew [1988] “Transcending General Linear Reality,” *Sociological Theory* 6 (2): 169–
86.
- [1991] “History and Sociology: The Lost Synthesis,” *Social Science History* 15 (2): 201–38.
- [1992] “From Causes to Events: Notes on Narrative Positivism,” *Sociological Methods and
Research* 20 (4): 428–55.
- [1995] “Sequence Analysis: New Methods for Old Ideas,” *Annual Review of Sociology* 21(1):
93–113.
- [1997] “Of Time and Space: The Contemporary Relevance of the Chicago School,” *Social
Forces* 75 (4): 1149–82.
- [2001] *Time Matters: On Theory and Method*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Abbott, Andrew, and Angela Tsay [2000a] “Sequence Analysis and Optimal Matching Methods
in Sociology: Review and Prospect,” *Sociological Methods and Research* 29(1): 3–33.
- [2000b] “Reply to Levine and Wu,” *Sociological Methods and Research* 29(1): 65–76.
- Abrams, Philip [1980] “History, Sociology, Historical Sociology,” *Past and Present* 87(1): 3–16.
- [1982] *Historical Sociology*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Aminzade, Ron [1992] “Historical Sociology and Time,” *Sociological Methods and Research*
20(4): 456–480.
- Cornwell, Benjamin [2015] *Social Sequence Analysis: Methods and Applications*. Cambridge, UK:
Cambridge Univ. Press.
- Emirbayer, Mustafa [1997] “Manifesto for a Relational Sociology,” *American Journal of Sociology*
103(2): 281–317.
- [2013] “Relational Sociology as Fighting Words,” in *Conceptualizing Relational Sociology:
Ontological and Theoretical Issues*, edited by Christopher Powell and François Dépelteau

- (New York, NY: Palgrave Macmillan), 209–211.
- Emirbayer, Mustafa, and Jeff Goodwin [1994] “Network Analysis, Culture, and the Problem of Agency,” *American Journal of Sociology* 99(6): 1411–1454.
- Bennett, Andrew, and Colin Elman [2006a] “Qualitative Research: Recent Developments in Case Study Methods,” *Annual Review of Political Science* 9: 455–476.
- [2006b] “Complex Causal Relations and Case Study Methods: The Example of Path Dependence,” *Political Analysis* 14(3): 250–267.
- Burawoy, Michael [1989] “Two Methods in Search of Science: Skocpol versus Trotsky,” *Theory and Society* 18(6): 759–805.
- Giddens, Anthony [1979] *Central Problems in Social Theory: Action, Structure and Contradiction in Social Analysis*. London, Macmillan.
- Griffin, Larry J. [1992] “Temporality, Events, and Explanation in Historical Sociology: An Introduction,” *Sociological Methods and Research* 20(4): 403–427.
- [1993] “Narrative, Event-Structure Analysis, and Causal Interpretation in Historical Sociology,” *American Journal of Sociology* 98(5): 1094–1133.
- [2007] “Historical Sociology, Narrative and Event-Structure Analysis: Fifteen Years Later,” *Sociologica* 3: 1–17.
- Hall, Peter A. [2003] “Aligning Ontology and Methodology in Comparative Research,” in *Comparative Historical Analysis in the Social Sciences*, edited by James Mahoney and Dietrich Rueschemeyer (Cambridge, UK: Cambridge University Press), 373–404.
- [2016] “Politics as a Process Structured in Space and Time,” in *The Oxford Handbook of Historical Institutionalism*, edited by Orfeo Fioretos, Tulia G. Falletti, and Adam Sheingate (Oxford, UK: Oxford University Press), 31–50.
- Lachmann, Richard [1989] “In Search of a Comparative Historical Methodology,” *Newsletter of the Comparative and Historical Sociology Section of the American Sociological Association*, 1(2): 2–3,
- [2013] *What Is Historical Sociology?* Cambridge, UK: Polity Press.
- Mische, Ann. 2011. “Relational Sociology, Culture, and Agency,” in *Sage Handbook of Social Network Analysis*, edited John Scott and Peter J. Carrington (Los Angeles, CA: Sage), 80–97.
- Moore, Barrington, Jr. [1966] *Social Origins of Dictatorship and Democracy: Lord and Peasant*

- in the Making of the Modern World. Boston, MA: Beacon Press (邦訳『独裁と民主政治の社会的起源—近代世界形成過程における領主と農民—』バリントン・ムーア Jr. 著、宮崎隆次・森山茂徳・高橋直樹訳、岩波書店、1986-1987) .
- Pierson, Paul [2000] “Not Just What, but When: Timing and Sequence in Political Processes,” *Studies in American Political Development*, 14(1): 72–92.
- [2003] “Big, Slow-Moving, and ... Invisible: Macrosocial Processes in the Study of Comparative Politics,” in *Comparative Historical Analysis in the Social Sciences*, edited by James Mahoney and Dietrich Rueschemeyer (Cambridge, UK: Cambridge Univ. Press), 177–207.
- [2004] *Politics in Time: History, Institutions, and Social Analysis*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Ragin, Charles C. [1987] *The Comparative Method: Moving Beyond Qualitative and Quantitative Strategies*. Berkeley, CA: University of California Press (邦訳『社会科学における比較研究—質的分析と計量的分析の統合にむけて—』チャールズ・C・レイガン著、鹿又伸夫監訳、ミネルヴァ書房、1993) .
- [2006] “The Limitations of Net-Effects Thinking,” in *Innovative Comparative Methods for Policy Analysis: Beyond the Quantitative-Qualitative Divide*, edited by Benoit Rihoux and Heike Grimm (Boston, MA: Springer), 13–41.
- [2014] “Introduction to the 2014 Edition,” in *The Comparative Method: Moving Beyond Qualitative and Quantitative Strategies, with a New Introduction* (Oakland, CA: University of California Press), xix–xxx.
- Sewell, William H., Jr. [1996] “Three Temporalities: Toward an Eventful Sociology,” in *The Historic Turn in the Human Sciences*, edited by Terrence J. McDonald (Ann Arbor, MI: University of Michigan Press), 245–280.
- [2005] *Logics of History: Social Theory and Social Transformation*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Tilly, Charles [1994] “History and Sociological Imagining,” *Tocqueville Review* 15(1): 57–72.
- [2001] “Historical Analysis of Political Processes,” in *Handbook of Sociological Theory*, edited by Jonathan H. Turner (New York: Kluwer/Plenum), 567–588.
- [2006] “Why and How History Matters,” in *The Oxford Handbook of Contextual Political*

Analysis, edited by Robert E. Goodin and Charles Tilly (Oxford, UK: Oxford University Press), 417–437.

— [2008] *Explaining Social Processes*. Boulder, CO: Paradigm.

Urry, John [2003] *Global Complexity*. Cambridge, UK: Polity (邦訳『グローバルな複雑性』ジョン・アーリ著、伊藤嘉高・板倉有紀訳、法政大学出版局、2014) .

Wasserman, Stanley, and Katherine Faust [1994] *Social Network Analysis: Methods and Applications*. Cambridge, UK: Cambridge Univ. Press.

Wu, Lawrence L. [2000] “Some Comments on ‘Sequence Analysis and Optimal Matching Methods in Sociology: Review and Prospect,’” *Sociological Methods and Research* 29(1): 41–64.